

ヴィーナス

2007(平成19)年10月3日鑑賞〈東映試写室〉

★★★



監督＝ロジャー・ミッシェル／出演＝ピーター・オトゥール／ジョディ・ウィットカー／レスリー・フィリップス／リチャード・グリフィス／ヴァネッサ・レッドグレイヴ（ヘキサゴン・ピクチャーズ、シナジー配給／2006年イギリス映画／95分）

……ベラスケスが描く「鏡を見るヴィーナス」は有名で、男はいくつになってもヴィーナスに憧れるもの。そしてそれは、あの方面がダメになっても同じ……？ 老人問題を描く映画は数あれど、名優ピーター・オトゥールが75歳にして主演として登場したこの映画には面白い新機軸が……？ 「来季は、胸上げの最中に死にたい」とは、楽天の4位を確定させた野村克也監督の新名言(?)だが、その視点からも、エロじじいとしての生きざまを全うさせたこの映画の主人公に拍手！



あの名優が75歳にして主演作に……？

この映画のチラシを見てどこかで観た顔だなと思っていると、何とそれは『アラビアのロレンス』(62年)での名演が燦然と輝いている名優ピーター・オトゥール。彼は1932年生まれだからおん年75歳だが、チラシに映るその姿は結構おしゃれでハンサム。しかも、チラシには、ベラスケスが描いた有名なヴィーナスの裸体の絵（「鏡を見るヴィーナス」）とともに、「男って、いくつになっても……」と思わせぶりなセリフが……？

老いさらばえていくだけのかつての名優をスクリーン上で観るのは寂しい限りだが、どうもこの映画はその逆で、老いてますますさかんな老人の物語らしい。すなわち、「若い頃はもてはやされ、女性とのさまざまな浮名を流した俳優のモーリスも、もはや70代。成功したはずの俳優の仕事も最近まわってくるのは脇役ばかりで、俳優仲間のイアン（レスリー・フィリップス）と“お迎え”を待つ日々を送っている。そんな彼がイアンの姪ジェシー（ジョディ・ウィットカー）をみてときめいた」というのが

この映画のエッセンス……。

さて、70代のエロじじいは、ピチピチギャルのジェシーを相手にどんなガールハンターぶりを見せてくれるのだろうか……？

ピーター・オトゥール vs. 三國連太郎

この映画でピーター・オトゥールは、前立腺の手術をせざるをえなくなったため、ついにあちらの方は不能になってしまった70代のエロじじい、いや失礼、いまだに色気を失わない若々しい老人モーリスを演じている。

ちなみに、『釣りバカ』シリーズでスーさんを演じている三國連太郎は1923年生まれだから既に84歳で、『釣りバカ18』（07年）ではついに鈴木建設の社長職を退くとともに認知症の症状が出はじめたが、スーさんが今なお会長職にとどまり第一線で活躍しているのは、モーリスやイアンさらにこの2人の旧友ドナルド（リチャード・グリフィス）らの年寄りぶりに比べると立派なもの。

もっとも『釣りバカ』シリーズでの三國連太郎は、あくまで枯れた味のあるおじいさんという雰囲気の色気は全くなしだが、この映画でみせるピーター・オトゥール演じるモーリスのエロじじいぶりは相当なもの……。

今ドキの女の子は……？

田舎から姪のジェシーがロンドンに出てくると聞いて、イアンはおいしい魚料理を食べることができ、ベッドサイドでベルを鳴らすとすぐに姪っ子が来てくれると期待したようだが、そりゃとんだ見当違いの思い込み……。今ドキの若い女の子の誰がそんなことをしてくれるものか、とっていると案の定……。そのうえ、ロンドンでモデルを目指しているというジェシーはぶっきらぼうでクソ生意気だから、1日であちまちイアンはダウン状態に……。

ところが、それが大好きなモーリスにはもってこいの状況だったようで、家連れ出してくれというイアンの要請にしたがってジェシーをロイヤル・コート劇場に連れていくことに。そんなところに行けば、昔役者だったモーリスは結構いいかっこできるのは当然だが、多分それはモーリスの計算のうち……。[このおじいさん、意外に有名なんだ]と少し尊敬させたいうえで、今度はパブに行きたいというジェシーの要望に応じて、年甲斐もなく（？）若者たちでござたがえすパブへもおつき合い。さら

に、ぐでんぐでんに酔っぱらったジェシーをイアンのアパートまで連れて帰り、ベッドに寝かせ、靴を脱がしてやるまで……。

女好きを自認し、エロじじいを実践していくためには、何よりもまめさが大切。私ならきつと、こんな酔っ払い女の世話をするのはかなわないと思うはずだが、何らかの下心をもつモーリスはそうは思わないようで、翌日以降も連日ジェシーとのデートを続けていくことに……。

仕事選びにも、好色さが……？

役者として顔が広いモーリスだから、モデル志望の若い女の子のバイト先くらいは容易に探せるだろうとも思っていたら、モーリスは早速ジェシーに仕事を紹介してやることに……。それが、この映画のタイトルである「ヴィーナス」の仕事。つまり、画家たちの前に立つ（座る？ 寝る？）ヌードモデルの仕事というわけだ。もちろんジェシーは最初それを拒否。そんな反応を示すジェシーに対するモーリスの説得ぶりが実にお見事。すなわちそれは、「女性の裸身の美しさは何も恥じることはない」というものだ。

その説得によって（？）、やっと半裸モデルになることを承諾したジェシーだったが、いくら人畜無害の老人でも、「モーリスが教室にいるなら服を脱がない」と主張したのは当然。そこで仕方なく教室から出ていったモーリスだったが、そこで示す年甲斐もないモーリスの行動は……？

ここらあたりでのピーター・オトゥールの演技は、精神性をとことん突きつめた『アラビアのロレンス』での演技以降、『何かいいことないか子猫ちゃん』（65年）や『おしゃれ泥棒』（66年）等でコメディタッチの二枚目役を演じていた頃の雰囲気を見事に再現……？ 仕事選びから、教室でのハプニングまで、モーリスの好色さには、いやはや……。

やはり、カネとモノでしか……？

私も一時期、女好きのMおじさんと一緒にキタの新地のクラブを飲み歩いたことがあったが、M氏の目的の90%以上は飲むことではなく、女の子のゲット、すなわちモノにすること……。その点、モーリスは既にその能力が失われているのだが、それでも若い女の子に対する話したい、触れたい、そしてあわよくば……という熱い思

いが、モーリスの人生を支えている原動力……？

モーリスの収入源として年金がどこまで機能しているのかはよくわからないが、俳優（といっても最近では死体役ばかりらしい……）として仕事をすればすぐに現金で報酬を支払ってくれるから、モーリスは大助かり。そして、モーリスはそんなカネをジェシーのために使うことがうれしそう……？ つまり、若い女の子の歓心を買うためには、やはりカネとモノしかないというわけだ。

そこでさて、モーリスはどんな手練手管を……？ 年金生活者となり、あっちの方面が不能になっても、なお若い女の子の温もりがほしいと思うあなたは、是非そんなモーリスのテクニクを学んでおかなければ……。

あまり深入りしない方が……

映画を観ている限り、ジェシーが連日モーリスとデート(?)しているのは、カネやモノの魅力だけではなく、モーリスというおじいさんその人に対する人間的な興味、関心もある様子。しかし、そうだからといってモーリスがいい気になってはダメ。あまり深入りすると大ケガをする危険があるのでは……？

大きなお世話ながら私がそんな風に心配していると、ジェシーの背後にチラホラと見え隠れしていたボーイフレンドらしき男が少しずつ表に出てくることに。そして、彼らがやろうとしたことは一体ナニ……？ これだから、最近の若いヤツは……と言われるわけだ。ジェシーとそのボーイフレンドがどんな悪さをしたのかは映画を観てのお楽しみだが、私に言わせれば、そりゃ実にけしからん、立派な犯罪行為……。

ところが面白いのは、ここでみせるモーリスの行動で、これぞ一本筋の通った好色じじいの若い女に対する愛、ともいえる立派なもの。でも、いくら若い女の子が好意的に接してくれていると考えても、やはりあまりうぬぼれず、年相応に距離感を保ってつきあった方がベター。つまり、あまり深入りしない方が……。

野村監督発言を实践したモーリスに拍手を！

リーグでは今年、野村克也監督率いる楽天イーグルスが大会で4位となった。そして、うれしそうに来季の監督を引き受けた野村監督は、記者たちに向かって「来季は胴上げの最中に、ポックリ死ぬことができれば最高の幸せ」と語ったことが報道された。これは、男なら誰でも願うことだが、なかなか現実はそうはいかないもので、

むしろ生き恥をさらすケースの方が多
いもの……？

ところが、この映画におけるモーリスの死にザマはまさに理想型……？ 入院中のベッドから無理やり抜け出したモーリスは今、ジェシーと共に海辺の砂の上を歩いていた。立ち寄ったレストランもその海辺もモーリスにとっては思い出の場所らしく、おぼつかない足どりながら、気分は最高の様子……。しかも寒い風が



©2006 Venus Pictures Ltd/UK Film Council/Channel 4 Television Corporation

吹く中、何と彼は靴を脱いで波の中に片足をつけてみたいと希望したから、ジェシーもビックリなら、私もビックリ。大丈夫かいな、と思っていると案の定……？

まあしかし、こんな大往生ができたモーリスはホントに幸せ。だって、モーリスのお葬式でジェシーは、別れて暮らしていた妻ヴァレリー（ヴァネッサ・レッドグレイヴ）から感謝されたし、モーリスが毎朝イアン、ドナルドと一緒に朝食をとっていたカフェでは、今イアンとドナルドはモーリスの大きな顔写真が載った新聞を誇らしげにウエイトレスに見せることができたのだから……。死ぬまでエロじじいぶりを貫いたモーリスに、心から拍手！

老人問題を描く映画の新機軸……？

高齢化社会に突入した日本では、河瀬直美監督の『殯（もがり）の森』（07年）が大ヒットしたし、近時は『そうかもしれない』（05年）や『終わりよければすべてよし』（06年）などのいかにも生々しい老人映画（？）も登場し、どのように「お迎え」を迎えるか、どんな死にザマがベストかというテーマが注目されている……？

他方、これらの暗くじめじめした老人映画（？）とは異なり、悪ガキ顔負けのカッコいい（？）4人の70歳超老人軍団が17億円の銀行強盗に生き甲斐を求めた映画『死に花』（04年）もあり（『シネマルーム4』338頁参照）、私はどちらかというところの方が好き。そんな目でみれば、70歳を過ぎてなおエロじじいとしての生きザマを貫いたモーリスは立派で、これは老人問題を描く映画の新機軸……？

2007(平成19)年10月6日記